

全部あつたかいものは

登場人物

米原幸雄（マイバラユキオ）

夏子（ナツコ）

栗鼠塚邦太郎（リスツカクニタロウ）

栗鼠塚香奈実（リスツカカナミ）

バック女（バックオンナ）

田中勝也（タナカカツヤ）

一場

飲料食品工場の休憩室。八畳の畳敷き。テーブルが一つ。部屋の隅にペットボトルのフタが一つ、転がっている。栗鼠塚邦太郎と米原幸雄が向かい合って座っている。田中勝也が壁際に座って雑誌をめくっている。米原が転がっているペットボトルのフタを指さした。はじまる。

米原 これ

邦太郎 ちがうよ

米原 栗鼠塚さんでしょ

邦太郎 ちがうよ

米原 栗鼠塚さんでしょ

邦太郎 ちがうよ

米原 栗鼠塚さんじゃないでしょ

邦太郎 ちがうよ

米原 栗鼠塚さんここ捨てたんでしょ

邦太郎 ちがうよ

米原 いや真面目に 真面目に栗鼠塚さん

邦太郎 真面目についてなんだよ

米原 じゃなんでここにペットボトルのフタ落ちてるんですか

邦太郎 誰かが飲んだんだよ

米原 誰が飲んだんですか

邦太郎 知らないよ

米原 栗鼠塚さんじゃないでしょ

邦太郎 だからちがうよ

米原 だから栗鼠塚さんしかこの休憩室使っていないでしょ

邦太郎 田中さんは

米原 え

邦太郎 田中さんは たとえば今いるよね 俺だけじゃないよねここ使ってるの

田中はヘッドホンをつけて雑誌を読んでいる。

米原 田中さんはいいんですよ

邦太郎 なんだよそれ

米原 いや真面目に 真面目に栗鼠塚さん

邦太郎 だから真面目についてなんだよ

米原 このフタ 疑われるの栗鼠塚さんなんですよ

邦太郎 そんなのどこでも落ちてるじゃん

米原 だってこれほら

米原、ペットボトルのフタを手に取り、

米原 ポカリ

邦太郎 うん

米原 ポカリ

邦太郎 うん

米原 他社のやつでしょ

邦太郎 そうだね

米原 他社製でしょ

邦太郎 俺じゃないよ

米原 工場の悪戯に使われたやつ 全部他社製なんですよ

邦太郎 え そうなの

米原 全部他社製のやつ しっかり選ばれて使われてるんですよ

邦太郎 だってすごい数使われてんだよね

米原 そうですよすごい数使われて 工場全部のレーンの隙間にぎちぎちに詰め込まれて すごい数でしょ でもうちのメーカーのやつ一つもないんです 意図的なんですよ

邦太郎 がんばったね

米原 なにががんばったんですか

邦太郎 いや俺らからすればいい迷惑だけど

米原 仕事にならないでしょ

邦太郎 そうだよせっかく出勤したのに

米原 そうでしょみんなせっかく出勤してるんですよ

邦太郎 悪戯されてね

米原 栗鼠塚さん

邦太郎 なに

米原 悪戯だとかそんなかわいいレベルじゃないですよ

邦太郎 え

米原 警察来てますからね

邦太郎 いやそうだね

米原 警察今実際調べてますからね

邦太郎 あの米原くん

米原 なんです

邦太郎 悪戯って最初に言ったの米原くんだよ

米原 僕そんなこと言ってないですよ

邦太郎 え 言ったよ「工場の悪戯に使われた」って結構はつきり

米原 いや言ってないですよ僕は栗鼠塚さんが悪戯だっていうからいや悪戯のレベルじゃないですよって

邦太郎 それにほら

米原 え

邦太郎 米原くん持つてるからね

米原 なんです

邦太郎 ペットボトルのフタ 米原くん今しっかり握ってるからね

米原、ペットボトルのフタを元の位置に戻す。ちよつと位置ずれを気にしてみたり、

邦太郎 ほら 指紋ついちゃったよ

米原 いやいや

邦太郎 どうするの警察来てるんだよ

米原 いやこれはちがうでしょ

邦太郎 俺触ってないからねそのフタ

米原 こんなどこにでも落ちてるでしょ

邦太郎 落ちてないよなかなか 他社のやつでしょ

米原 他社ですよ

邦太郎 この工場の敷地内にはなかなか落ちてないやつだよ 警察怪しがるよ

米原 僕来る前からここにありましたからねこれ

邦太郎 自作自演だね

米原 え

邦太郎 自作自演だね

米原 いや栗鼠塚さん見てたでしょ 僕来る前からここにあったでしょ

邦太郎 俺はだって米原くんが言うまで気づかなかったよ

米原 いやこんなの気づくでしょ誰でも

邦太郎 誰でも気づくのに俺米原くんに言われるまで気づかなかったよ

米原 いやいや栗鼠塚さん

邦太郎 いやいやいや

米原 いやいやいや栗鼠塚さん

邦太郎 いやいやいや

米原 いやいやいや栗鼠塚さん

邦太郎 いやいやいや

米原 真面目に 栗鼠塚さん真面目に

邦太郎 だから真面目になってなんだって

米原 話元に戻しましょ

邦太郎 話どこにも行ってないよ

米原 栗鼠塚さん僕社員ですよ

邦太郎 え

米原 え

邦太郎 うわ

米原 いや社員だからってなんだというわけではね

邦太郎 社員だから米原くんはなに アルバイトだから俺はなに

米原 社員とかアルバイトとか関係ないですから

邦太郎 社員とかアルバイトとか関係ないと俺は思ってたんだけどね 米原くんが持ち出すからさ

米原 栗鼠塚さん疑われてるんですよ

邦太郎 うん

米原 事務所内でこの休憩室怪しいって言われてるんですよ

邦太郎 根拠もないくせにね

米原 根拠ないですけどでも仕方ないでしょ この部屋ってそういう部屋じゃないですか

邦太郎 そういう部屋って

米原 栗鼠塚さんこの部屋みんなに何て言われてるか知ってます

邦太郎 え なに

米原 臭いって

邦太郎 え

米原 栗鼠塚臭いって

邦太郎 なにそれ

米原 だっていつもここにいるでしょ栗鼠塚さん

邦太郎 俺臭くないよ

米原 栗鼠塚さん

邦太郎 俺臭くないよ

米原 友達いないでしょ

邦太郎 え

米原 友達いないでしょ栗鼠塚さん

邦太郎 なえ

米原 いないでしょ

邦太郎 なにそれ米原くん

米原 休憩になるともう毎日ずっと一人でしょ

邦太郎 いやだから田中さんはよ

米原 だから田中さんはいいんですよ

邦太郎 だからなんだよそれ

米原 田中さんは友達にはカウントされないでしょ

邦太郎 え なんてなんで

米原 あの 僕は 本当にはいけなと思ってます この休憩室 というかこの休憩室を使ってる人は 本当 申し訳ないんですけど孤立してます でも それで犯人だつて決めつけられるの そういうなんか仕組みとか構図とか 嫌じゃないですか でも それって栗鼠塚さんがなんとかすることじゃなくて 僕ら社員も考えなきゃいけないことじゃないですか みんなに仕事割り振って 連絡事項まとめたりとかして その中でなんとか出来るはずなのに面倒くさがって社員もそういうの知らんぷりするじゃないですか 僕もそうだし 申し訳ないって思うじゃないですか だからせめて栗鼠塚さんたちの話も聞いて 僕だけでもこの休憩室のみんなは犯人じゃないって思いたいじゃないですか 思いたいんですよ 思いたいのになんでって なんでペットボトルのフタ落ちてののって しかもご丁寧に他社製のやつ 工場に持ち込んだじゃないやつ なんて落ちてるんですかって悔しいでしょ ね 悔しいんですよ僕は

米原は視線を落としてたたみを見た。邦太郎もたたみを見た。田中は優しく雑誌をめくってあげた。

邦太郎 うん

米原 はい

邦太郎 まあ

米原 いや

邦太郎 なんかごめんね

米原 いやそんな

邦太郎 なんか 米原くんも大変だねなんか

邦太郎は出ていこうと、

米原 え 栗鼠塚さん

邦太郎 すぐ戻ってくるよ

米原 いや話 すごい途中ですよ

邦太郎 すぐ戻ってくるから

米原 いやそういうとこですよ栗鼠塚さん

邦太郎 仕事しばらく始まらないでしょ

米原残される。田中がいる。米原は部屋を一旦出ようか迷う。田中に声かけしようか。ヘッドホンしてるしな。あ、田中がヘッドホンをとった。田中は雑誌を山積みしてるところに、今読んでいた雑誌を置いて、別のを取って、元の位置に戻す。戻るところで、

田中 まだ仕事始まらないよね

米原 はい

田中 うん

米原 それ田中さんですか

田中 え 僕は水筒持ってきてるからペットボトル買わないよ

米原 いやその雑誌

田中 これ 誰のか分かんない

米原 ああ

田中 まあこんな日が一日くらいあってもいいよね

田中はヘッドホンをする。雑誌をめくる。それを見てる米原。栗鼠塚香奈実が来る。

香奈実 お邪魔します

米原 お疲れ様です

香奈実 あれ 米原くん珍しいね

米原 香奈実さんも珍しいです

香奈実 え 米原くんだけ

米原 いやあの田中さん

香奈実 ああ

香奈実座る。

米原 え 珍しいです香奈実さんここ来るの

香奈実 うん ちよつと あの人は

米原 なんか出ていきました

香奈実 え 出かけたの

米原 いや出かけたのかどうか

香奈実 仕事前だよ

米原 いやトイレかもしれないし

香奈実 なにそのつかみどころのない感じ

米原 まあ栗鼠塚さんですから

香奈実 てかこの部屋ね

米原 はい

香奈実 入りづらいよね

米原 ああ入り口狭いし

香奈実 なんか開放感ないよね 昭和の部屋って感じ

米原 昭和ってなんですか

香奈実 それにさ やっぱ臭いよね

米原 いや まあ はい

香奈実 臭いよねここ やっぱりね

米原 でもほら なんか別に不快なやつじゃないでしょ

香奈実 ええ不快だよ 十分不快

米原 生活の匂いみたいな感じでしょ

香奈実 なにそれすごい嫌 あの人の身体から染み出てる感じ

米原 染み出たっていうかほら 何か食べた後のカップ麺とかのほら 匂い

香奈実 え あの人がカップ麺食べてた

米原 いや食べてないですけど

香奈実 ほらほら食べてないでしょ なのに臭いんだよ

米原 そんなこと言ってるうちに戻ってきますよ

香奈実 うわどうしよ

米原 なにが

香奈実 なんか会うのドキドキする

米原 なんて 夫婦でしょ

香奈実 だって最近全然会ってないもん

米原 え 夫婦でしょ

香奈実 夫婦ですけど

米原 別居とか

香奈実 別居したいよ

米原 え一緒に住んでて会ってないんですか

香奈実 だってあの人帰ってこないもん

米原 それ え 浮気してるとか

香奈実 まさか

米原 ですよ

香奈実 あんな甲斐性なしに浮気出来る財力ないでしょ

米原 ですよ

香奈実 だから私思ってるのはね

米原 はい

香奈実 あの人 ここ住んでるんじゃない

米原 ええ この部屋にですか

香奈実 そう

米原 ここ休憩室ですよ

香奈実 休憩室だけでも

米原 住まないでしょさすがにここには

香奈実 だってここ二十四時間開いてるよ

米原 いやでも守衛さんとか

香奈実 誰もこんなところ見にこないでしょ

米原 いやはやいやはや

香奈実 だってでもだつてさ そうでないとこのにおいは説明つかないよこの生活臭

説明つかないよこの生活臭

そこへ、栗鼠塚邦太郎が入ってくる。手にカップ麺を持っている。

邦太郎 うわ

米原 あ

邦太郎 え うん

邦太郎、少し端っこに座る。

邦太郎 お湯沸いてなかったから

米原 すいませんなんか占拠してる感じで

邦太郎 いやそんな 別に俺の部屋じゃないしここ

香奈実 あんたの部屋みたいなもんでしょ

邦太郎 そんなことないよ

香奈実 あんたここ住んでるでしょ

邦太郎 え

米原 いやちよつとね

香奈実 だってあんた全然帰ってこないじゃん あんたいつもどこにいるのよ

邦太郎 ちよつと待ってちよつと待って

香奈実 うんちよつと待つ

邦太郎 あのさ 俺今から食べるから お湯入れてくるから 俺話す準備出来たら話してもらっていいかな

香奈実 はい待った ねえあんた今どこ住んでるの

邦太郎 ちよつと待ってちよつと待って

香奈実 ちよつと待ったよ

邦太郎 ちよつとすぎるだろあなた もつと もつとちよつと待って

香奈実 えこれだけ答えてよあんたどこで寝てるのよ今

邦太郎 俺今からさ

香奈実 これだけ答えて

邦太郎 食べるから

香奈実 あんたここで寝てるんじゃないの

米原 香奈実さん ね

香奈実 しかもなに 今から食べるの お湯沸かすわけないじゃん これから仕事なのに

邦太郎 まだ始まらないでしょ

香奈実 あんたのせいだね

邦太郎 え

米原 いやちよつと二人とも話聞いてもらっていいですか

香奈実 米原くんどう思う 自分が疑われているのに今からご飯食べようとしてるんだよどう思う お湯沸かすわけないじゃん

米原 まあ待機中ですから

香奈実 しかもこの人ご飯食べてそれから普通に仕事出来ると思ってるんだよ 今から警察来てこの人捕まるのに仕事の心配する必要があると思う米原くん お湯入れる必要あると思う米原くん

米原 栗鼠塚さん犯人で決まったわけじゃないですから

邦太郎、カップ麺を持って出ていこうとする。

香奈実 どこ行くのあんた

邦太郎 お湯入れに行くんだよ

香奈実 え今の話聞いてた

邦太郎 聞いてなかった

香奈実 あんたに話があるから米原くんも私もここに来てるんですけど この臭い何の人のか分かんない臭い部屋

邦太郎 お前においのことほきちんと気を使って言えよ

香奈実 あんたの方が気を使いなさいよここあんたの部屋じゃないんだよ あんたみんなの場所自分の臭いカップ麺のおいで埋めてどうするのよ

邦太郎 まだお湯入れてないだろ臭くないだろ

香奈実 沁みついてるのよこの部屋にあなたの寝泊まりしてる臭いにおい

邦太郎 寝泊まりしてないよこんな休憩室で

香奈実 じゃあなんであんた帰ってこないのよ

邦太郎 お前浮気してるだろ

香奈実 は

邦太郎 お前浮気してるだろ

香奈実 なに なんで

邦太郎 お前浮気してるだろ浮気してるだろ

香奈実 なんでそれ どこ発信

邦太郎は出ていく。

香奈実 え 米原くんばらした

米原 え なにが

米原、田中を気にする。田中は雑誌を読んでいる。

香奈実 私たちのことあいつに言った

米原 え なんです

香奈実 別にいいけど

米原 いや香奈実さんちよつと

香奈実 うん

米原、香奈実、とりあえず座る。田中が尻をかく。

香奈実 あれ当てずっぽうだよ

米原 え なんで

香奈実 なんで

米原 その話今広げます

香奈実 広げる

米原 なんで

香奈実 やばいでしょ

米原 いややばいでしょ

香奈実 幸雄

米原はかたまる。

香奈実 幸雄

米原 いや

香奈実 おっくん

米原 いやいや

香奈実 ねえおっくん

米原 いややばいでしょ

香奈実 なにがやばいか説明しておっくん

米原 これ見て ほら

米原 ペットボトルキャップを指さし。

米原 ペットボトルのフタ

香奈実 なのにおっくん

香奈実は米原をじつと見ている。

米原 いややばいでしょ これ僕この部屋来る前からあったんですよ

香奈実 おっくん

米原 やばいでしょ

香奈実 おっくん

米原 しかもこれほら ポカリね

香奈実 おっくん

米原 やばいでしょ 他社のやつね

香奈実 おっくん

米原 他社製品のペットボトルキャップ

香奈実 おっくん

米原 やばいでしょね

香奈実 おっくん

米原 香奈実さんね

香奈実 おっくん

米原 梶谷さんとか山尾さんとか絶対栗鼠塚さんの名前出しますよ 警察来ますよこれ

香奈実 おっくん

米原 やめてそういうの

香奈実 おっくん

米原 やばいでしょ

香奈実 おっくん警察来ちゃう

米原 警察来るんだよこの休憩室

香奈実 やばいおっくん

米原 やばいんだよこのフタ

香奈実 捨ててきておっくん

米原 それ証拠隠滅だよ

香奈実 証拠隠滅しておっくん

米原 出来ないってそれは

香奈実 おっくん

米原 いつやめてくれるのそれは

香奈実 旦那が警察に捕まっちゃうおっくん

米原 ねえもうやめてそれ

香奈実 私この工場いられなくなっちゃうおっくん

米原 誤解されるからやめて

香奈実 誤解ってなに

米原 え

香奈実 なんでこの部屋来たの米原くん

米原 え 栗鼠塚さん多分犯人じゃないし でも梶谷さんも山尾さんも絶対栗鼠塚さんのこと警察に言うし 香奈実さん来たのもそうでしょ

香奈実 私はあなたがいるからよ

米原は香奈実の表情を見て、テーブルの端を見た。香奈実は米原ににじりよった。ところに夏子が来た。

夏子 お疲れ様です

夏子は休憩室の隅に座り、コンビニ袋から菓子パンを取り出して食べる。

香奈実 ねえ この部屋臭くない

夏子 そんなには

香奈実 栗鼠塚さんっているでしょ

夏子 はい

香奈実 栗鼠塚さんみたいなにおいしない

夏子 はい

香奈実 え 臭くない

夏子 え そんなには

香奈実 え 栗鼠塚さんのこと好きなの

夏子 え

香奈実 うん

夏子 あの 愛してるくらいには好きです

夏子は田中をじつと見て、菓子パンを頬張る。

田中 うん

夏子 …

田中 僕も 残念になりたいな

夏子 …

田中 そしたら夏子ちゃん僕も好きになってくれるかな

夏子 …

そこへ、顔にパックを張り付けた女が入ってくる。部屋の隅に体育座りする。薄着だ。はだしだ。田中はその女が少し気になるが、それより言葉を発さない夏子の方が気になる。いや、でも顔になんか付けてるな。あんまりじろじろ見れないけれど、不審者かな。それにしても夏子ちゃんは全く反応しないな。なんだろなこの空気。夏子ちゃんの知ってる人かな。何か話してくれないかな。

夏子 田中さんは適度にさぼるからですね

田中 え

夏子 田中さんも私も仕事適当にさぼるでしょ 軍手確かめるフリしてストーブの前陣取ったり

田中 うん

夏子 帽子被りなおすフリしてストーブの前陣取ったり

田中 うん

夏子 邦太郎さんはそれしないでしょ

田中 半袖だしね

夏子 半袖でしょ寒いでしょ明らかに それで自分一人だけトイレちかくなってよくトイレ行って社員に注意受けた

りしてるでしょ

田中 うん

夏子 注意受けたくせして半袖着てるでしょ 邦太郎さんしかも自分で自分一人だけトイレちかいかいのか分かってないでしょ明らか寒いからですよ

田中 そうだね

夏子 私邦太郎さんのこと好きです

田中 うん

夏子 邦太郎さん犯人だったらもうとまらないかも

田中 邦ちゃんはそんなことしないよ

夏子 分かんないですよ

田中 邦ちゃんは出来るだけ人に迷惑かけたくない人だから

夏子 私告白しようかな

田中 結婚してるよ

夏子 浮気するんです

田中 それはやばいね

夏子 なんて告白しようかノートに書いてよう

夏子は自分のカバンからノートを取り出す。テーブルにノートを広げて何を書こうか思索する。

田中 邦ちゃん戻ってくるよ

夏子 戻ってきませんよ 私そういう勘は鋭いですよ

邦太郎戻ってくる。

邦太郎 お

田中 お

邦太郎 社員の二人帰ったでしょ

田中 うん

夏子、ノートをひっそりと閉じる。

邦太郎 なんかすごいことになってるよ

夏子 なんです

邦太郎 工場長来たよ

夏子 え もう十二時なのに

邦太郎 初めてなんじやない夜中に工場長来るの 社員みんな集められててさ 狭い事務所きちさちになって訓示受けてる

夏子 なんですか「訓示」って

邦太郎 え ああいう偉い人がなんか言う時「訓示」っていうんじやないの 俺分かんないよ かしこまったこと

田中 訓示だよ

邦太郎 ですよね

田中 訓示だよ 偉い人はなんでもそう

邦太郎 ですよね

夏子 これ今日仕事あるんですかね

邦太郎 ないんじやないかな 警察も忙しそうにしてるし

夏子 私たちどうするんですかね

邦太郎 どうするんだろ 始業時間までにはなんか言われると思うけど

夏子 私帰れって言われても無理ですよ

邦太郎 ね 終電ない人いるよね

田中 犯人はもう帰ったのかな

邦太郎 え

田中はヘッドホンをつける。身体を少しゆする。

邦太郎 あ それ それ田中さんどうしたんですかそれ

田中 …

邦太郎 ずっと言おうと思ってたんですよ めっちゃかっこいいじゃないですかそれ

田中 …

邦太郎 ね 田中さんちよつと いや絶対なんにも聴いてないでしょ田中さん さつきから ね 聞こえてるでしょ田中さん

顔にパックをつけた女は立ち上がって、出ていく。邦太郎と田中と夏子は一斉に出て行った方を見る。

邦太郎 今の誰

夏子 ね 分かんないですよ

邦太郎 え 夏子ちゃんも知らないの

夏子 知らないですよあんな人

邦太郎 田中さんも

田中 うん

邦太郎 え 工場の人とかじゃなくて

夏子 分かんないですよねパックしてて

邦太郎 え やばいんじゃないこれ

夏子 犯人とか

邦太郎 え いつからいたのあの人

夏子 邦太郎さん入ってくるちよつと前ですよ

邦太郎 米原くん知ってるのかな

夏子 知らないと思いますよ

邦太郎 言った方がいいよね

夏子 いや誰か見つけるでしょ

邦太郎 だからそれがさ

夏子 なんです

邦太郎 誰かが見つけたとしてさ それがこの休憩室から出てきたところだったらさ よけいに怪しくなるじゃないここが

夏子 そうですね

邦太郎 ただでさえ俺疑われてるのにさ

夏子 あ 妻から伝言が

邦太郎 妻

夏子 妻 邦太郎さんの妻

邦太郎 ああ

夏子 シヤキツとしろって

邦太郎 え

夏子 シヤキツとしろって

邦太郎 なにそれ 野菜

夏子 野菜じゃないですか

邦太郎 なんなんだ俺の妻は

夏子 これはもしかしてですよ

邦太郎 うん

夏子 犯人を見つけてることじゃないですか

邦太郎 野菜が

夏子 邦太郎さんが

邦太郎 なにその無責任な感じ

夏子 さっきの人は格別に怪しいですよ

邦太郎 俺頭使えないんだよこういう時 あ

夏子 はい

邦太郎 あの人このフタ触ってた

夏子 フタ

邦太郎 これ ポカリのフタ

夏子 え 誰のですかこれ

夏子 フタを取ろうと、

邦太郎 あ 夏子ちゃんダメ

夏子 なんです

邦太郎 それ 触っちゃダメ

夏子 え 汚いんですか

邦太郎 証拠だから

夏子 証拠

邦太郎 そう 工場のレーンにきちきちにペットボトルのフタ詰められてたでしょ

夏子 らしいですね

邦太郎 全部他社製らしい

夏子 そうなんですか

邦太郎 だから米原くんがこのフタのこと変に疑ってたん

だよ え これ夏子ちゃんじゃないよね

夏子 私ポリ飲まないです

邦太郎 だよ

夏子 これ証拠じゃないですか

邦太郎 俺言ってくる 今工場長も来てるでしょ

夏子 え 工場長に言うんですか

邦太郎 だって社員に言っても無視されるからさ 工場長でしょ

夏子 やめた方がいいんじゃないですか

邦太郎 いや 工場長だよ

邦太郎出ていく。

夏子 邦太郎さんやめた方がいいですよ

田中、ヘッドホンを外す。立つ。田中出ていく。突然夏子一人になる。座って、菓子パンの残りを頬張る。田中のヘッドホンをつける。テーブルの上の閉じたノートを開く。菓子パンを食べながら何か書いている夏子。米原が入ってくる。休憩室の入り口に立ち、

米原 え 一人

夏子 …

米原 なっちゃん

夏子 …

米原 え 一人 なっちゃん

夏子 …

米原、夏子とテーブルを挟んで座る。

米原 なっちゃん

夏子は目をあわせない。

米原 違うんだよなっちゃん

夏子 …

米原 僕もすごい迷惑してるんだよ 全然そんなつもりもないのにさ 勝手に付き合ってることにしてるの 結婚してるのにさ 栗鼠塚さんいるのにさ ひどくない

夏子 …

米原 本当にどうにもなってないから 浮気とか欠片もないから ねえ聞いてよ

米原、夏子のヘッドホンを取る。あ、田中のヘッドホンを夏子がつけていてその夏子の頭から田中のヘッドホンをとる。夏子、米原を見る。

米原 なに聴いてたの

夏子 内緒

米原 尾崎でしょ 尾崎 これ田中さんのでしょ

夏子 そうだよ

米原 じゃ尾崎

夏子 なんで

米原 ああいう大人は尾崎だよ 壊れかけのレデイオだよ

夏子 それちがう人だよ

米原 え 尾崎だよ

夏子 あれ思い出せない

米原 尾崎だって

夏子 ちよつと待ってもう出てくる

米原 尾崎

夏子 だから変な名前言わないで

米原 変じゃないだろ尾崎は

夏子 え 思い出せない長瀬剛しか出てこない

米原 なんにしても壊れかけがいいんだよ

夏子 なんだったかな

米原 ああいう尾崎はちゃんと真っ直ぐ動いてるものが嫌なの 壊れてるか壊れかけ

夏子 なにその顔

米原 え

夏子 そのしたり顔

米原 そんな顔してないよ

夏子 田中さんのこと馬鹿にするのやめなよ

米原 あの尾崎が犯人だよ

夏子 え

米原 犯人なんだよあの尾崎

夏子 なんの

米原 分かるでしょ

夏子 え

米原 徳永英明

夏子 え あ ああ

米原 そんな話どうでもいいんだよ

夏子 すごいすっきりした びっくりした

米原 僕本当に香奈実さんなんでもないから

夏子 なんで下の名前なの

米原 え 香奈実さん だって旦那いるでしょ 栗鼠塚さんいるでしょ ごっちゃになるじゃん

夏子 邦太郎さんのこと邦太郎さんて呼べばいいじゃん

米原 なんで下の名前なの

夏子 え

米原 邦太郎さんはなんなの

夏子 この工場のアルバイト

米原 なっちゃんなんであんなこと言ったの

夏子 私変なこと言っていないよ

米原 香奈実さんにさ 栗鼠塚さん「愛してる」って

夏子 愛しててじゃないよ「愛しててくらい好き」だって言ったんだよ

米原 なにそのあてつけ

夏子 何しに来たの

米原 え

夏子 この休憩室

米原 なっちゃんに会いに

夏子 なんか言いに来たんでしょ

米原 会いに来たの これ本当

夏子 変な人いたよ

米原 え 尾崎

夏子 尾崎じゃない

米原 なに変な人って

夏子 顔面にバック張った女の人 話出てないの

米原 聞いてない

夏子 じゃもうすぐ出るよ 邦太郎さん工場長に話してくるって

米原 え なっちゃん見たの

夏子 見た この休憩室入ってきた

米原 え 大丈夫だった

夏子 なんにもしてない ただそこ座ってぼーっとしてただけ

米原 なんか喋った

夏子 なんにも喋らなかった

米原 なんで

夏子 だって話しかけていきなり襲われるの嫌じゃん

米原 田中さんとかいなかったの

夏子 いたけど田中さんは尾崎なんでしょ

米原 え 意味分かんない

夏子 あなたが言い始めたことです田中さんは尾崎

米原 早く言ってよ僕に

夏子 だから今言ったでしょ

米原 今警察来てるんだよ すごいもうさ 伝えなきゃいけないじゃん

夏子 だから邦太郎さん工場長のところ行ったんだって

米原 なんで工場長なんだよ僕に言ってよ

米原 出ていこうとする。夏子、米原がさり気なくフタを手を持ったことを知っている。

夏子 米原くん フタ

米原 なに

夏子 なんでペットボトルのフタ持って帰るの

米原 ゴミじゃん

夏子 証拠でしょ

米原 なんの

夏子 え 工場のレーン壊した犯人の

米原 こんな証拠になんないよ

夏子 いいから置いてってよ

米原 ゴミじゃん

夏子 いいの証拠にしたんだから私たちの

米原 私たちって誰なの

夏子 私たちって私のことだよ

米原 たちって

夏子 邦太郎さんと私のことだって

米原 なんで ゴミじゃんこれ

夏子 いいから置いてここもう置いて

米原 真面目にやれよ警察来てるんだよ

夏子 なんでそんなに必死なの

米原 え

夏子 米原くん犯人

米原 なんで僕なんだよ

夏子 犯人なんだ

米原 犯人は田中さんだって

夏子 パック女でしょ

米原 え

夏子 犯人に一番近いの田中さんじゃないでしょパック女でしょ。なんでそんなに田中さん嫌いな。嫌いなだけで犯人扱いするの人のしてどうかと思うよ。

米原 あんたはどうなんだって。人のこと変な人だつて言つて

夏子 変な人って言ったのはパック女で田中さんのことじゃ……

米原 だからなんでパック女は変な人なの

夏子 え 変じゃん わざわざこんなとこまでパックしてこないじゃん裸足だったし

米原 人を犯人扱いするのがどうかしてるの。なんにも乱暴もしてない女の人変人扱いするのも一緒でしょ

米原、フタをそこいらに放つて出ていく。夏子、フタを見て、

夏子 米原め さらに指紋がべつとりだ ふっふっふ

夏子、ハンカチを取り出し、フタを包み、慎重に元の位置に戻す。部屋の隅の毛布を取り、くるまる。毛布から顔を出して、フタを見る。頭からすっぽり毛布にくるまる。しばらく。香奈実と邦太郎が入ってくる。テーブルを挟んで座る。香奈実は邦太郎の顔を覗き込む。

香奈実 勘弁してよ

邦太郎 ……

香奈実 いきなり事務所入ってきてさ。いきなり何を言出すの

邦太郎 ごめん

香奈実 あの人工場長だよ

邦太郎 ごめん

香奈実 私の立場考えてよ

邦太郎 ……

香奈実 ただでさえ私の工場で肩身狭いよ。なんで分かるよ

邦太郎 俺がいるから

香奈実 あんたがいるからじゃないよ

邦太郎 え

香奈実 あんたが別に変人扱いされたって私痛くもかゆくもないよ

邦太郎 あ そう

香奈実 だつて私みんなと笑ってるもんあんたのこと。大変です。ね。おたくの旦那さん。変態です。ね。おたくの旦那さん。甲斐性なしです。ね。おたくの旦那さん。アルバイトです。ね。おたくの旦那さん。あんたすごい。言われようだよ。社員の間で。なんだ。か。私。逆。に。鼻。が。高。い。よ。本。当。に。ど。う。し。よ。う。も。な。い。男。を。養。つ。て。あ。げ。て。い。る。徳。の。高。い。嫁。さ。ん。

邦太郎 じゃ別に肩身狭くないじゃん

香奈実 それが最近肩身が狭いのよ

邦太郎 なんでなの

香奈実 え 分かんない

邦太郎 分かんないよ

香奈実 じゃもういい

邦太郎 いや言つてよ。なんかあったの

香奈実 なんであんたみたいな甲斐性なしに悩みを打ち明けなきゃいけないの

邦太郎 甲斐性なしだつて悩み聞くらいい出来るだろ

香奈実 え あんた本当に分かってないの

邦太郎 なんだよ

香奈実 あんたつてさ

邦太郎 うん

香奈実 本当に残念だね

邦太郎 じゃなんで結婚したんだよ

香奈実 あんたが私のこと幸せにするって言ったからよ

邦太郎 あ うん

香奈実 あんたなんで帰らないの

邦太郎 え 気分じゃないから

香奈実 こんな部屋で寝泊まりしてさ

邦太郎 してないよだから

香奈実 あの毛布なによ

邦太郎 寒いから持ってきただけだよ

香奈実 寒いからつてあんな分厚い毛布家からわざわざ持つてこないでしょ

邦太郎 実際持ってきてるでしょ

香奈実 これ持って帰るね

邦太郎 いや待つてよ

香奈実 なんでよ

邦太郎 あのさ

香奈実 私車だから持って帰るね

邦太郎 いやあのさあのさ

香奈実 あんた電車でしょ。ずっと持って帰らないよ。これ

邦太郎 寒いだろ持って帰ったら

香奈実 え あんたこれどうやって持ってきたのこ

邦太郎 え 担げるよ

香奈実 担いで 電車で

邦太郎 歩いて来れないだろうって

香奈実 え 電車の中で担いできたの なに入れてきたの

邦太郎 え まるめたら片手でも持てるでしょ

香奈実 まるめたら片手で持てるよ

邦太郎 まるめて片手で持ってきたよ

香奈実 なんで え なんてはだかの毛布片手で担いで電車乗れるの

邦太郎 いやまあちよつとは ちよつとは恥ずかしかったけど

香奈実 普通の人ははだかの毛布持って電車乗らないんだよ

邦太郎 言わんとしてることは分かるけどさ なんにしても寒いんだよ

香奈実 こんなところで寝泊まりするからでしょ

邦太郎 寝泊まりしてないよ

香奈実 じゃどこに寝泊まりしてるのよ

邦太郎 それは

香奈実 どこ

邦太郎 言えないよ

香奈実 これ持って帰るね

邦太郎 いや待ってよ

香奈実 もう無理 こんな臭い部屋に置いとけない

邦太郎 寒いんだよ 寒い 寒いんだよ

邦太郎は思いのほか大きな声を出した。香奈実は目をぱちくりして邦太郎を見た。邦太郎の前に座りなおした。邦太郎は気まずそうにした。香奈実は邦太郎の頬をはたいた。

邦太郎 え なんで

香奈実 あんたそういう声出せるんならさ

邦太郎 ごめん

香奈実 工場長にもっと強く言えたよね

邦太郎 ごめん

香奈実 あんなおっさんに負けてどうするのよ

邦太郎、立つ。

香奈実 どこ行くの

邦太郎 ごめん

香奈実 あんた何回ごめんて言えばいいの

邦太郎 今のは違うんだよ あの 浮気をな

香奈実 うん

邦太郎 さっき俺なんかムシクシしてお前に浮気してるだろとか言つてな ごめん

香奈実 うん

邦太郎 俺そういうところがダメなのな 考えもせず人を傷つけること平気で言つちゃうとこな まあ あの

香奈実 いいよ

邦太郎 ごめん

香奈実 うん

邦太郎 強く言えばいいのな 俺な

香奈実 え

邦太郎 もう一回工場長のところ行ってくる 今度はな

香奈実 え もういいよ

邦太郎 今度はがっつんと言ってくる

香奈実 や もういいよあんた

邦太郎出ていく。香奈実が残された。テーブルの上のノートを何気なく読む。なんだろこれ。私が一番読んじやいけないものじゃないのかひよつとして。夏子が毛布から顔を出していた。

香奈実 …

香奈実 これ あなたの

夏子 はい

香奈実 そう

夏子 …

香奈実 ごめんね 読んじやって

夏子 自分のじゃないノートあんまり読まない方がいいですよ

香奈実 そうね

夏子 今みたいな気持ちになるから

香奈実 そうね

夏子、ノートをテーブルの上からとって、自分の傍らに置く。

香奈実 あなた米原さんと付き合ってるの

夏子 そうですね 内緒ですけど

香奈実 なのに邦太郎のことが好きなの

夏子 はい

香奈実 じゃあ米原くんなんて置いてけばいいのに

夏子 米原くんは二つ隣にいるとしっくりくるんですよ

香奈実 なにそれ

夏子 米原くんはなんていうか 彼が私のこと100好きだったから私の方は21くらい好きでいてあげればちょうどいいんですよ

香奈実 なんだか難しいことしてないそれ

夏子 難しくないんですよ 彼の特性というか ていうか彼すごいですよ なかなかそんな気持ちを調節させてくれる人っていないじゃないですか

香奈実 いないね

夏子 あなたもそうですよ

香奈実 私 香奈実

夏子 あなた

香奈実 …

夏子 香奈実

香奈実 なに

夏子 香奈実もそうですよ

香奈実 「さん」くらいつけてよ

夏子 邦太郎さんには調節出来ないうすもん

香奈実 そう

夏子 香奈実さん実は嬉しいですよ

香奈実 なにが

夏子 自分以外に邦太郎さんのこと好きな人がいてくれて

嬉しいんですよ実は 邦太郎さんそれでも香奈実さんのことが好きでそれ分かってるんですよ 香奈実さん 邦太郎さん家帰ってきたら思い切りあまえた声出そうとしてるんですよ だから私こ何日かで勝負だなんて思って 邦太郎さんが家に帰るまでが勝負だなんて思って 邦太郎さん今どこに泊まってるか知ってます

香奈実 知らない

夏子 教えない

香奈実 …

夏子 でも安心していいですよ こういう勝負で大体私負けますから 負けてきて今こうやって終電逃してここにいるのが私ですから

香奈実 …

夏子 出たっていいですよ

香奈実、出ていこうと。

夏子 あ

香奈実 なに

夏子 この毛布だけでも少し置いといてください 寒いし

香奈実 きれいにしといてよ

夏子 はい

香奈実出ていく。夏子、香奈実が出て行ったあとをじっと見ている。ノートを投げつける。たたみを見る。立ち上がって投げつけたノートを手に取る。

夏子 こいつ置いておくと これはこれで面白いな

夏子、ノートをテーブルに置く。出ていく。戻ってくる。ノートのあるページを開いて背表紙を上にして、読みかけの本のような形でテーブルに置く。出ていく。田中が入ってくる。ノートを見つけて、

田中 なんだこの罫は

田中は不自然に盛り上がった毛布を見る。毛布に向かって、

田中 あざといと思うよこれは

田中、ノートを閉じてテーブルに置いて、毛布をめくる。

田中 夏子ちゃあん

誰もいない。田中は一人でなにをしている。テーブルの上のヘッドホンを耳にかけて、雑誌を読む。そこへ米原と邦太郎がどたばたと入ってくる。

米原 勘弁してくださいよ

邦太郎 …

米原 いきなり事務所入ってきて いきなり何言い出すんですか

邦太郎 ごめん

米原 あの人工場長ですよ

邦太郎 ごめん

米原 栗鼠塚さん自分の立場分かっています

邦太郎 アルバイト

米原 アルバイトでしょ

邦太郎 でもあの

米原 なに

邦太郎 俺堂々としてたでしょ

米原 なに

邦太郎 俺はつきり言ってたでしょ ものを

米原 栗鼠塚さん自分の立場分かってます

邦太郎 ごめんごめん

米原 ただでさえ疑われているのに栗鼠塚さん

邦太郎 ごめん

米原 僕どれだけ必死になって栗鼠塚さんのことかばって

邦太郎 ごめん

米原 分かってます栗鼠塚さん

邦太郎 分かってるって

米原 「って」ってなんですか「って」って

邦太郎 て

米原 「分かってるって」「ごめん」「って」ってなんです
か「って」って

邦太郎 ごめん

米原 それですって

邦太郎 うん

米原 いや もう はい

邦太郎 うん

米原 いやもういいんです いいんです

邦太郎 うん

米原 はい

米原、何気なくテーブルの上のノートを手取る。ばらばらめくる。ばらばらめくるつもりが非常に気になることが書いてあるからばらばらめくれなかった。凝視した。ノートを閉じてテーブルに置く。

米原 僕上司失格ですよ

邦太郎 え じょうし

米原 上司 栗鼠塚さんの上司

邦太郎 ああ 上司

米原 僕失格ですよ

邦太郎 そんなことないと思うよ 米原くんは まあ良い上司になれると思うよ

米原 いや僕今もう上司でしょ

邦太郎 ああ

米原 良い上司なれますかね

邦太郎 あ違う違うのなってると思うよもう今すでに良い上司 米原くん

米原 じゃあなんで僕になんにも言ってくれないんですか

邦太郎 え

米原 栗鼠塚さん 工場長に言う前に僕に言うことあるでしょ

邦太郎 え あ 米原くん俺さ

米原 はい

邦太郎 犯人見つけたよこの休憩室で 女の人 全身にパ
ック貼ってさ

米原 違うでしょ

邦太郎 あ 全身じゃなかった顔だけだった 顔だけパッ
ク貼り付けた不審者 犯人 ごめん言わなくて

米原 夏子と浮気してるでしょ

邦太郎 え

米原 栗鼠塚さん夏子と浮気してるでしょ

邦太郎 夏子って 夏子ちゃん

米原 なっちゃん

邦太郎 え 俺が

米原 栗鼠塚さんが

邦太郎 工場長に言う前に米原くん

米原 工場長に言う前に僕に

邦太郎 夏子ちゃんと浮気

米原 してるでしょ

邦太郎 してないよ

米原 じゃなんでこのノートに

田中 あっ

田中が突然叫んだ。田中は小躍りしながら米原の手からノ
ートを奪った。そのまま毛布にくるまった。

田中 あっ あっ あっ あっ あっ

米原 …

邦太郎 田中さん なんですかそのノート 田中さん

米原 すみません

米原は自分の頭を抱え込むようにして、表情をぐしゃぐし
やにしている。

米原 すみません僕 よく考えたらそんなこと そんなことあるわけがないのに 栗鼠塚さんにそんな そんな浮気な
んでするお金ないのに すみません僕

邦太郎 うん

米原 僕あの栗鼠塚さん あの

邦太郎 なに

米原 すみません

邦太郎 うん なにが

米原 すみません栗鼠塚さん

邦太郎 だからなにが

米原 浮気してすみません

邦太郎 え

米原 すみません

邦太郎 米原くんて彼女いるの え 結婚してるの

米原 だから僕じゃなくて相手が 相手が結婚してるの

邦太郎 ああそつちの浮気

米原 すみません栗鼠塚さん

邦太郎 いや うん

米原 …

邦太郎 謝るのはいいけどさ 俺じゃなくてさ その 浮
気された男の人の方に謝った方がいいんじゃないかな

米原 すみません

邦太郎 まあいいんだけどさ それだけその女の人が な
んというか魅力的なんだよね 好きなんだよね

米原 あんまり魅力的じゃないんです

邦太郎 あ そうなの

米原 はい

邦太郎 じゃあなんで浮気なんかするの

米原 僕もよく分かんないんです

邦太郎 ああ 女の人の方が米原くんのこと好きになつち
やっただ

米原 それがよく分かんないんです

邦太郎 ああそうなの

米原 なんだか全然なんにも分かんないんです 全然僕と
えっちしてくれないんです

邦太郎 そうなの

米原 全然お泊りしてくれないんです 全然えっちしてく
れないんです 僕なんで浮気してるんでしょうか

邦太郎 それは 身体じゃないなんというかじゃやないの

米原 よく分かんないんです

邦太郎 うん

米原、突然田中のくるまっている毛布を剥ぎ取る。田中が
あらわになる。米原、田中をじつと見る。元の位置に戻る。米
原。

米原 栗鼠塚さん犯人になりませんか

邦太郎 え

米原 栗鼠塚さん犯人になったら一番まるくおさまると思
う

邦太郎 全然まるくないよ

米原 あの すみません変なこと言って 僕行きますね

邦太郎 え 待ってよ

米原 僕やらなきゃいけないことあるんで

邦太郎 もうちよっと 座って

米原 なんですか

邦太郎 すごいひつかかるの 今の米原くんの

米原 いや勢いで言っちゃっただけです

邦太郎 俺犯人になったらいいの

米原 すみません僕間違えただけなんで

邦太郎 間違えてないよ すごいひつかかるの

米原 いや もう すみません

邦太郎 座ろうよ

米原 僕本当にやることあるんで

邦太郎 座ろうってさ

田中 邦ちゃん

邦太郎 はい

田中 これを聴きな

邦太郎 え

田中、邦太郎にヘッドホンを渡す。邦太郎、ヘッドホンを
つける。両手をヘッドホンにあてる。

邦太郎 え

田中 良いだろう この曲

邦太郎 え

田中 良い曲だろう

邦太郎 はい

田中 聴いてな 僕がいいっていうまで

邦太郎 はい

邦太郎、正座する。

田中 米原くん

米原 はい

田中 ちよつと座つて

米原 なんです

田中 話があるから

米原 え 怖いんですけど

田中 ほら邦ちゃんも音楽聴いてるから

米原 これ なんにも聴いてないやつでしょ

田中 聴いてるよ

米原 いや絶対これ聴いてないやつでしょ

田中 米原くん 良い上司っていうのはね 部下がなんにも聴いていなくて ああ聴いているねと優しくそつと見守ってあげる人のことをいうんだよ

米原 これ聴いてないやつでしょ

田中 聴いてないよ

米原 聴いてないでしょ

田中 でも話があるんだよ

米原 なんです

田中 ひとまともにしちゃいけない

米原 はい

田中 世の中はね 誰か一人が犯人になればそれで全部解決するような仕組みではないのだから

米原 はい

田中 工場のレーンにペットボトルのフタをきちきちに詰

めた犯人と ここにペットボトルのフタを置いた犯人は別人なのかもしれない

米原 はい

田中 この休憩室に入ってきたパック女はただ道に迷った人かもしれない

米原 はい

田中 一つずつ 犯人を整理する時間が必要なんじゃないかな

米原 田中さんがこのフタ置いたんですか

田中 え

米原 整理しましょうよ 田中さん置いたんですかこのフタ

田中 僕じゃないよ

米原 じゃあ誰なんです

田中 分からないよ

米原 じゃあ工場のレーンきちきちにしたの田中さんなんです

田中 僕じゃないよ

米原 じゃあ誰なんです

田中 あの僕が言いたいののは落ち着く時間が必要だねって

米原 誰なんです

田中 分からないよ

米原 じゃあパック女は田中さんですか

田中 あの 僕は 女じゃないよ

米原 じゃあ誰なんです

田中 パック女は誰なのかな

米原 フォークリフトで女の子轢き殺したの誰なんです

田中 え

米原 フォークリフトで女の子轢き殺したの誰なんです

田中 …

米原 僕この工場の中で田中さんのこと一番信用してないですから

田中 …

米原 出ていく。邦太郎、田中にヘッドホンをつける。電気を消す。

邦太郎 かし（スイッチを押す音）

田中 良い曲だね

邦太郎 …

田中 良い曲

暗い部屋は窓明かりだけ。窓の外はすぐ隣の建物の壁だから、街灯の明かりもほとんど入ってこない。お互いの輪郭だけがもぞもぞと動いて、二人は少し楽しかった。耳が澄まされた。自動車のエンジン音やクラクション。車の音しかしなかった。夜が本当に真っ暗になった時、休憩室の入口に人影が現れた。人影は休憩室の暗闇に目を凝らしているのか、しばらくじっと動かなかった。地下鉄の音だろうか、ズズズズ。低い音が鳴っている。

田中 座りなよ

人影はテーブルの隣に座った。顔だけが白い。パック女だった。

田中 どこ行つてたの
バック女 はい

田中 あなた休憩室出て行つて 僕探したんだよ
バック女 はい

田中 探したのに

バック女 はい

田中 どこ行つてたの

バック女 はい

二人の会話は途切れた。低い音がだんだんと大きくなった。突然だった。邦太郎がバック女の頭を右手いつぱいに、むんずと、掴んだ。

邦太郎 捕まえました

田中 …

邦太郎 田中さん 犯人捕まえました

田中 …

バック女は邦太郎の右手小指を掴んでひねり上げる。

邦太郎 いたたたたたあたたあいたいたいたいたいた

バック女は部屋を出て行つた。邦太郎はもんどりうつてい
る。あまりの痛さに声が出ない。

田中 犯人なんて言うからだよ

邦太郎 …

田中 邦ちゃん この世界のどこにも 犯人なんて人はい
ないんだ

邦太郎 …

田中 ヘッドホンあげるよ

転換。休憩室。午前二時。香奈実が座っている。米原が入
つてくる。米原、無言で、香奈実とテーブルを挟んで座る。

香奈実 お疲れ様

米原 本当ですよ

香奈実 本当にね

米原、腕時計を見て、

米原 もう二時まわつてるじゃないですか

香奈実 誘導終わったの

米原 はい

香奈実 何人くらい残ってるの

米原 五十人くらいですかね

香奈実 まあ残るよね みんな終電ないもんね

米原 なんか合宿みたいな感じでわいわいしてますよ

香奈実 よく五十人も寝れる場所あったね

米原 みんな不審者がうろついていることなんて考えてない
ですよ

香奈実 私も実感ないもん

米原 すごい質問されましたよ

香奈実 なに

米原 給料出るんですかって

香奈実 なんで

米原 これは拘束時間にあてはまらないんですかって

香奈実 すごいねそれ

米原 だから僕逃げてきたんですよ

香奈実 うそ 私に会いに来たくせに

米原 うそじゃないですよ別れましょう

香奈実 ああ

香奈実、うなだれる。

米原 はい

香奈実 結婚しよう

米原 …

香奈実 子ども育てよう

米原 …

香奈実 オーストラリア行こう

米原 …

香奈実 おっくと子どもと三人で

米原 …

香奈実 オーストラリア行こう

米原 仕事忙しいですから

香奈実 お正月は毎年オリンピック見に行こう

米原 毎年やってないやつですからそれ

香奈実 テレビ見よう

米原 疲れて僕 今日も すぐく疲れて僕 もう毎日すぐく疲れて僕 気づいて僕 ああこれ浮気してるからだなんて

香奈実 私もしんどいよ

米原 でしょ なんか意味ないでしょこれ

香奈実 肩身すごく狭いよ

米原 でしょ だから別れましょ

香奈実 うんわかったバイバイ

米原 え

香奈実 うん

米原 え 分かったんですか

香奈実 うん別れるの分かった

米原 僕すぐく疲れたんです

香奈実 うん

米原 だから香奈実さんと別れたくて

香奈実 分かった別れよ

米原 僕疲れてるんですすぐく

香奈実 私もしんどいよ

米原 でしょ

香奈実 だから別れましょ

米原 なんで

香奈実 私これ以上おっくんのしんどそうな顔見たくない

米原 でしょ

香奈実 だから別れよ

米原 なんで

香奈実 今までありがとう

米原 香奈ちゃんが悪いんだよ

香奈実 そうだね

米原 毎日絶対家帰ってさ 誰もいない家帰ってさ そんなに栗鼠塚さんのこと忘れられないの そんなに待ってたいの

香奈実 分かんない

米原 そんな曖昧な返事で納得できるわけないじゃん

香奈実 だから別れよ

米原 え なんで

香奈実 今までありがとう

米原 えっちしてくる

香奈実 しないよ別れるもん

米原 これまでもしてくれなかったじゃん

香奈実 おっくんのこと別に好きじゃないもん

米原 ま

香奈実 …

米原 マリッジブルー…

香奈実 あははなにそれおもしろい

米原 おもしろいですかこれ

香奈実 おもしろいおっくん

米原 マリッジブルー…

香奈実 二度目はだめだよ

米原 …

香奈実 この休憩室さ 便利じゃない

米原 ちょうど外れた場所にありますがもんね

香奈実 この誰からも忘れられた感じ

米原 ね

香奈実 来るかな

米原 え

香奈実 不審者

米原 警察いますよ

香奈実 まだいるの

米原 廊下のとこ立ってますよ

香奈実 え 朝までいるのかな

米原 だって現場に警察いたのに不審者出てけが人まで出たんですよ なにしてんだってなるでしょ

香奈実 誰も責めたりしないよ警察

米原 仕方ないですよ

香奈実 じゃあさ それでももしここ来たらさ

米原 なにが

香奈実 不審者

米原 もう逃げてますって工場の外

香奈実 いやそれでももし来たらね

米原 はい

香奈実 幽霊だよ

米原 え

香奈実 警察見張ってるのに

米原 いや来ないですよ

香奈実、おもむろに電気を消す。

香奈実

かち

かち

米原 え

香奈実 …

米原 なんですか

香奈実 来るかな

米原 来ないでしょ

香奈実 なんで

米原 警察いるのに

香奈実 来るよ

米原 なんで

香奈実 あの時この部屋 真つ暗だったらしいよ

米原 え

香奈実 不審者来た時

米原 ああ

香奈実 誰もいないと思つて入つてきたのか そういう人がいると思つて入つてきたのか

米原 そういう人つてどういう人

香奈実 電気消して 真つ暗闇にいたい人

米原 なにその人種

香奈実 いるんじゃない

米原 なんかすけべえ

香奈実 すけべえね

米原 真つ暗な工場外れの畳敷きは

香奈実 すけべえね

米原 すけべえだね

香奈実 すけべえね

米原 すけべえだね

香奈実 真つ暗な 工場外れの畳敷き(うたう)

米原 すけべえだね(うたう)

香奈実 すけべえね(うたう)

米原 すけべえだね(うたう)

香奈実 すけべえね(うたう)

米原 真つ暗な 工場外れの畳敷き(うたう)

香奈実 すけべえね(うたう)

米原 すけべえだね(うたう)

香奈実 真つ暗な 工場外れの…(うた…)

ど、ど、ど、ど。パツク女がやってくる。外の芝生を突き抜け壁を突き抜け前かがみに。休憩室の中にいる。香奈実の頭を掴み、休憩室の外へ引きずっていく。

香奈実 きゃーーーーーーーーーーーーーーーー

転換。休憩室。午前二時。明かりがついている。米原と夏子がテーブルを挟んで座っている。

米原 ていう夢を見たんだ

夏子 そう

米原 ね

夏子 え

米原 危ないだろ

夏子 うん

米原 みんなのどこ行こうよ

夏子 行かないよ

米原 行かないじゃなくて もうこれ 命令

夏子 なにその夢

米原 この休憩室が危ないつて知らせるための夢だよ

夏子 歌の部分いらなくない

米原 雰囲気出ただろ

夏子 気持ち悪かったよ

米原 危ないのにこの部屋にこだわる意味が分からないよ

夏子 怖いなら一人でみんなのどこ行きなよ

米原 だから怖いとかじゃないんだつて アルバイトみんなに避難命令

夏子 だったらアルバイトみんなに声かけなよ

米原 声かけてみんな避難したの なつちゃんでもう最後

夏子 え 私最後の

米原 だから行こうよ

夏子 私のこと後回しにしたの

米原 え あの そういうのじゃないんじゃない

夏子 身内は最後だとかかっこつけたの

米原 つけてないつてたまたま

夏子 じゃあそれで私不審者に襲われてたら米原くんちくしょおつて泣き叫んでたんだね ちょうど朝日が昇つて頬をつたう涙とよだれがぎたぎた輝いてちくしょお なんて俺は夏子を後回しにしてしまったんだあ はい ヒーロー気取り

米原 なつちゃん

夏子 ヒーロー気取り

米原 処女ブス糞

夏子 え

米原 処女ブス糞

夏子 米原くん

米原 …

夏子 私ブスじゃないよ

米原 処女ブス糞

夏子 私かわいいよ

米原 処女ブス糞

夏子 私処女じゃないよ

米原 処女だよブスだし

夏子 あなたともえっちしたでしょ

米原 してねーわい

夏子 したでしょ

米原 ちんぼこいれてねーわい 未遂だわい ちんぼこ未遂だわい

夏子 え

米原は毛布を被ってふるえる。

夏子 電気消そうか

米原 …

夏子 私とえっちしようとしたんでしょ だから私最後だったんでしょ みんな遠くにひとかたまりにして 警察にびくびくしながら 私とえっちしたかったんでしょ 電気消したげるよ 私じゃなくてバック女が来るかもね

香奈実が来た。

香奈実 そんなところで

夏子 え

香奈実 いいから来なさい

香奈実 は毛布を勢いよくめくる。米原がいる。

香奈実 なんだ米原くんか

香奈実、出ていく。米原はふるえている。夏子、田中のヘッドホンを米原にかけて、毛布を被せてやる。背中をぼんぼん、叩いてやる。その頃、休憩室の窓の外で、田中とバック女は並んで敷石に座っていた。

田中 僕はね 免許を持っていないんだ

バック女 はい

田中 本当に 何の免許もないんだ

バック女 はい

田中 車も バイクも 調理師も

バック女 はい

田中 僕 何も運転出来ないんだ

バック女 はい

田中 本当に何も運転出来ないんだ

バック女 はい

田中 出来ないことをやれって言われてもさ

バック女 はい

田中 出来ないんだよ

バック女 はい

田中 出来なかったでしょ僕

バック女 はい

田中 出来なかったんだよ でも僕言ったよね

バック女 はい

田中 出来ませんよって

バック女 はい

田中 僕は言ったんだよ 出来ませんよって

バック女 はい

田中 なのにやれって言われてもさ

バック女 はい

田中 それは説明はされたけどさ

バック女 はい

田中 そもそも免許もないのにさ

バック女 はい

田中 ゲーセンみたいでしょって言われてもさ ゲーセン行かないからさ

バック女 はい

田中 ゲーセンって言われてもさ

バック女 はい

田中 てか死んでないよね

バック女 はい

田中 死んでないよね

バック女 はい

田中 僕免許もないのにさ

バック女 はい

田中 ごめんね

パック女 はい

田中 こんな話して

パック女 はい

田中 こんな話してね

パック女 はい

田中 ごめんね

パック女 はい

田中 あなた誰

パック女 はい

田中 え 誰

パック女 はい

田中 誰ですかあなた

パック女 はい

田中 お願い

パック女 はい

田中 実は僕免許持つてるけどさ

パック女 はい

田中 ごめんね でも僕免許とってからほとんど運転して

パック女 はい

田中 嘘ついてないよね

パック女 はい

田中 いや「はい」じゃなくてさ

パック女 ぴん

田中 え

パック女 ぴん

田中 え なに

パック女 ぴん

田中 ぴんってなに

パック女 ぴん

田中 なんですかそれ

パック女 ぴん

田中 え はいかいいえ どっち

パック女 ぴん

田中 ねえどっち

パック女 ぴん

田中 ごめん

パック女 ぴん

田中 ごめんよ

パック女 ぴん

田中 ぴんやめて

パック女 ぴん

田中 「はい」って言って

パック女 ぴん

田中 ぴんやめて

パック女 ぴん

田中 「はい」って言ってお願い

パック女は懐からマイクを取り出して、歌う。

すきなおうたをいれよう

22

休憩室では、邦太郎が半分だけ顔を出している。夏子振り向いて見つけて、少し驚く。

邦太郎 妻 来た

夏子 妻

邦太郎 妻 来たでしょ 今

夏子 妻来ました 出ていきました

邦太郎 そう

邦太郎入ってくる。右手に包帯を巻いている。

邦太郎 思ったとおり 作戦勝ちだよ

夏子 え

邦太郎 作戦勝ちだよ

夏子 なんです作戦で

邦太郎 俺の妻はね この工場で俺の生息区域はこの休憩室しかないと思ってるんだよ 事実そうなんだけどねそこを逆手にとったの この部屋の隣の自動販売機の隙間に挟まって待ってたらね 案の定妻が来たんだよ でも妻の奴は俺の生息区域は休憩室だけだと高を括っているからね 自動販売機の隙間なんて目もくれずにつかつかつかつか そして妻がこの部屋を探ったあとに俺がこの部屋に入れば ほら 安全だろう

夏子 なんで妻に追いかけてるんです

邦太郎 保険に入っていないんだよ

夏子 え 保険

邦太郎 国民健康保険に入っていないことが妻にバレてし

まったんだよ

夏子 え それで追いかけてるんですか

邦太郎 ほら俺指の骨折れたじゃん

邦太郎は右手を夏子に見せる。

夏子 うわ

邦太郎は右手を引っ込める。

邦太郎 まあそれはいいんだけど

夏子 よくないでしょ

邦太郎 いや折れてはいないから

夏子 うそ今折れてるって言ったでしょ

邦太郎 折れてるくらい痛いけど折れてはな
れど痛くない 緑色で腫れてるだけ 触らなけ

夏子 だからそれが折れてる人の症状ですって

邦太郎 包帯巻いたし大丈夫だよ

夏子 意味ないですよそんな巻き方

邦太郎 すぐに病院行けって

夏子 すぐに行きましょうよ病院

邦太郎 こんな時間に だって夜中の二時だよ NHKで
言ってたよ夜勤の病院で大変なんだよ

夏子 なんで病院に気使うんですか行きましようよ

邦太郎 だから保険に入っていないんだよ

夏子 手続きしたらいいじゃないですか

邦太郎、たたみの一点を見ている。フタがある。

夏子 え

邦太郎、フタを手に取り、

夏子 あ

邦太郎 俺犯人だからさ

夏子 なに言ってるんですか

邦太郎 俺工場のレーン壊しちゃったからさ

夏子 なんで え 邦太郎さん

邦太郎 ごめんね黙ってて

夏子 邦太郎さんにそんな勇気のあること出来るわけない
でしょ

邦太郎 俺刑務所へ行かなくちゃ

夏子 そんなに病院行きたくないの

邦太郎 いや犯人だからさ

夏子 ちがうでしょ

邦太郎 いや俺が犯人だったら辻褃があうんだよ 全部
みんな 保険にも入らないで四十歳までアルバイトしかし
てこなかった人生の辻褃がさ

夏子 邦太郎さんのえだまめみたいな人生

邦太郎 なんかやりなおせる気がする

夏子 妻に言わないんですか

邦太郎 あいつに言うとな

夏子 はい

邦太郎 悲しむでしょ

夏子 私好きです

邦太郎 え

夏子、邦太郎の胸に手を置く。

夏子 私 米原くんのが好きです

邦太郎 あ そう そうだね

夏子 米原くん 好きです

邦太郎 うん よかった

夏子 米原くん

邦太郎 うん え

邦太郎、夏子の手をさりげなくどける。夏子がにじり寄っ
てくる。

邦太郎 え 夏子ちゃん

夏子 米原くん

邦太郎 ちょ え

ふと邦太郎は窓際に人影をみとめる。田中が窓の向こう、
外に立っている。隣にはパツク女。

邦太郎 え ちよつと なんなの ちよつと夏子ちゃん

米原君ふおこにいるのかな 夏子ちゃん

夏子 愛してるくらい好き

邦太郎 米原くん

夏子 米原くん

邦太郎 え なにこの状況

夏子 好き 愛してる

邦太郎 待って どこなの米原くん

夏子 なんとかして

邦太郎、夏子の目の前で猫だましを繰り返す。夏子怯む。

邦太郎 …

邦太郎、出ていく。夏子、田中を見つめる。田中、休憩室のなを見つめている。香奈実が入ってくる。

香奈実 今 誰か猫だまししなかった

夏子 しました

香奈実 あの猫だましの音 邦太郎のじゃない

夏子 そうですね

香奈実 え 邦太郎はどこ

夏子 え なんて出会ってないの なんてそんなちようど入れ替わりで入って出てるの 廊下で会ってるでしょ絶対 私のこと馬鹿にしてるでしょ

香奈実 なによあなたこそ

夏子 なによ

香奈実 そんなところに隠して

香奈実、毛布を剥ぎ取る。米原がふるえている。

香奈実 なんだ米原くんか

香奈実、座る。

香奈実 あいつの作戦が分かったわ あいつきつと私のことどこかで監視してるのよ それで私がこの休憩室から出た時を見計らって入ってくるのよ そうでしょう

夏子 はい

香奈実 私ここで待つわ

夏子 なんて

香奈実 あいつに言ってやりたいことがあるのよ

夏子 邦太郎さん病院行きませんよ

香奈実 行くわよ ほら

香奈実、右手を夏子に見せる。包帯が巻いてある。

夏子 え 妻

香奈実 ちよつとね いやだいぶね だいぶ痛かったけど思い切っちゃった

夏子 なにを え

香奈実 見てほら 緑色

夏子 やばいでしょこれ 病院

香奈実 これをあいつに見せるの あいつはほつとけないわよこういうの 病院行けって言うわよ したら私言ってるの 病院行くわって あいつは一緒に行くわ あいつは病院に行くわ

夏子 …

香奈実 人気がない夜の病院の待合室なの 別に命に関わる怪我じゃないから私たち二人して待合のソファに座るわ あなた邦太郎

夏子 え

香奈実、座りなおして夏子の肩に自分の肩を寄せる。

夏子 …

香奈実 ここ どこ

夏子 休憩室ですけど

香奈実 なに寝ぼけてるの 病院よ

夏子 休憩室ですけど

香奈実 あんたどこでも休憩室だと思ってるでしょ 病院も あの工場の外れの臭い畳敷きの部屋も

夏子 …

香奈実 なんだ知らない人の家に来たみたい

香奈実 おう

香奈実 なによ

香奈実 浮気するぞ浮気

香奈実 やめてよ病院で

香奈実 お前浮気してみたいに浮気するぞ俺と

香奈実 私やらしいことしてないよ

香奈実 えっちしたんだろ

香奈実 してないよ

香奈実 キスは

香奈実 キスはした

香奈実 それは 女の人はえっちよりキスが大事っていうぞ

香奈実 大丈夫よ 私女じゃないから

香奈実 そうなの

香奈実 うん

香奈実 女だと思ってた

夏子、香奈実の右手の小指をひねる。

香奈実 いたいたいいたいたいたいたいたいたいたいたいた

夏子 あんたがもつと早く来てたら

香奈実 ひいひい

夏子 私きちんとあんたの目の前で邦太郎さんにフラれてみせたのに、あんたが早く来ないから

香奈実 ひいひい

夏子 邦太郎さん行っちゃったじゃない 警察に嘘自首しに行っちゃったじゃない

香奈実 うそじしゅ

夏子 嘘自首しに行ったんだよ邦太郎さん あんたが止めに行かないでどうするのよ

香奈実 うそじしゅって

夏子 早く行け 邦太郎さん追いかけて行け

香奈実、出ていく。夏子、米原を見る。

夏子 米原くんもいつまでそこにいるの

米原 …

夏子 ここ私の部屋なんだけど

米原 …

夏子、米原の装着している田中のヘッドホンをとる。

夏子 出たってよ

米原 なっちゃん

夏子 はい

米原 これ着けてみな

夏子 え

米原 良い音楽流れてるから

夏子 え これ

米原 うん すごい泣けるおん…

夏子、ヘッドホンを放る。ヘッドホンが休憩室の壁を破壊して廊下に立っている警官の股間を潰して工場の汚いトイレに落ちる。

米原 あーーーーーヘッドホン ホオオオオオオオオオ

米原、ヘッドホンが空けた壁の穴をどたばたと確認する。

米原 壁に 穴が

夏子 かち

夏子、部屋の電気を消す。窓の外の明かりだけになる。窓の外では休憩室の何かを眺めながら田中がパック女に語りかけていた。

田中 僕ね 絵本作家になるんだ 絵は描けないけど

パック女 はい

田中 でもこうやって、ちようど窓の外から部屋の中を覗き込むみたいに描いたら、絵って描けるんだらう

パック女 はい

田中 絵本作家になれば仕事のこととかも面白おかしく描けるだらう

パック女 はい

田中 だから絵本作家なんだ

パック女 はい

田中 どこかにないかなあ 絵本作家のアルバイト

パック女 はい

田中 人気あるかなあ 絵本作家のアルバイト

パック女 はい

休憩室に落ちていて、ペットボトルのフタに花が咲く。夏子が毛布を被っている。

夏子 今何時

米原 え 暗くてよく見えない

夏子 腕時計光らせなよ

米原 暗くてよく見えないよ

夏子 朝までまだ時間あるかなあ

米原 まだだよ

夏子 そうか

米原 みんなのそこ行かないの

夏子 行かない いじめられるし

米原 じゃあ僕もいるよ

夏子 米原くん社員でしょ

米原 朝になるまでだよ

夏子 じゃあ見張っててよ

米原 うん

夏子 警察が襲ってこないか

米原 うん

夏子 なんにもなかったら

米原 うん

夏子 一緒に寝てあげる

米原 …

夏子、毛布を被る。米原、テーブルの上のノートをめくる。
夏子、毛布からころん。休憩室じゃないところに行く。米原、
毛布をめくる。誰もいない。米原、毛布を被る。休憩室の入口に人影が立っている。邦太郎。

邦太郎 ねえ

米原 …

邦太郎 ねえ 米原くん

米原 なんで分かったんですか

邦太郎 なんか独特のさ 若い男の子のにおいがした

米原 僕じゃないですか

邦太郎 怒られたよ

米原 え

邦太郎 警察に怒られた 真面目にしなさいって

米原 それはそうでしょ 嘘自首なんだから

邦太郎 真面目が分からないよ米原くん

米原 栗鼠塚さん

邦太郎 うん

米原 寒いでしょ 入ります

邦太郎 うん

米原、毛布をめくる。邦太郎、毛布にくるまる。

おわり

午前四時二分。